

きびのつと

NO.49 月刊

昭和七年七月一日 発行 (非売品)
発行所 岡山県瀬野郡吉備町東町二五 宇垣方
吉備親老協会

42号 続き

加茂城趾 (その二)

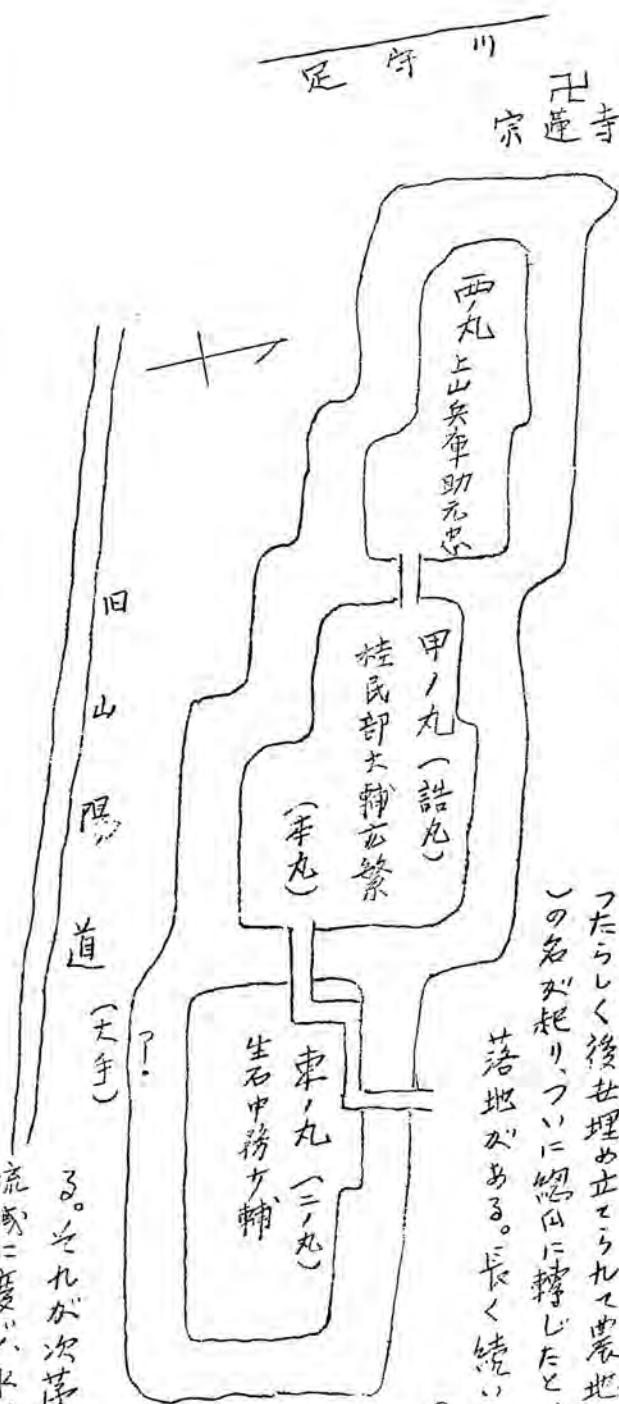
天正十年高松の役に、毛利氏は加茂城を防衛する備中勢の部将生石中務、同藤四郎の應援として、桂民部大輔広繁、同右衛門大夫を遣はして、甲ノ丸に控えさせ、雑兵総勢三千二百余騎が堅めて、羽柴軍の西下に備えた。この生石名弟は豫て備前の宇喜多秀家と盟約があり、反忠を抱いていたので、時機をみて備前勢を城下に引き入れて、一挙に城を陥んとする計画であつた。(この生石は、大猷によると、門前村(いま足守町)に生石山(おし)あり。山峰、東北に走り西南に突起して山あり。生石越山(峠のこと)と云う。昔この頂に城を構え、生石城にして生石中務並、同藤四郎に共に居るとあり。天正の役には作戦上、加茂城に籠城したものと考へられる)。

天正十年四月、宇喜多秀家は秀吉の先鋒として、備前中に行動を起した。生石中務は桂民部大輔広繁と防禦の方法を協議するようになり、これを討取らんと暗夜に広繁の居る誥ノ丸に行き、門を叩いたが、夜番のものは門を堅くしめて容易に開けられぬ。これは平素門衛の怠慢なことを叱責されたところがあるので、生石中務とは知らず何心なく愚直な態度をとつたが、生石はこれに陰謀を知つて用心するものと疑心を抱き急いで東ノ丸に帰り、誥ノ丸に向つて溝渠に逆茂木を設け、垣楯を置きなごして、戦備を始め、広繁はこれを見えて不思議に思ひ、追手に備へるべき筈を、本城に向つて武備をなすのは逆心があるものと覺り、誥ノ丸にもこれに對抗して壕裏にお儀を積み重ねて垣楯を構へて知らぬ態度をせしめた。案にたがわぬ生石は夜の内に備前の軍勢をこの丸にしのばせ、夜の明方から誥ノ丸に向つて一斉に鉄砲をあびせかけ、関の聲をあげて攻めなかつた。広繁は

か収て用意して、いたこととて、これに應じて鉄砲、矢箭をさかんに乱射した。夜は全く明けはなれて、北方を見渡すと、秀吉の存陣、雖ヶ鼻の方面から軍勢引きも切らず、続々加茂城を目がけて押寄せてくる。この時岩崎山に陣する味方の吉川元春は、この勦滅を見て、小早川隆景に向つて二ノ丸に火箭を放てば、二ノ丸は芦屋造りの陣ばかりだから、誤なく勝利を得らるゝではないかと。いつた。隆景は肯いたが、二の戦法は広繁もよく知つて、いる筈だ。レ、今は逆風だから火箭攻めを、しなりのであらう。と、いつて、いる敵へ、風向が變つて備前勢の方へ吹き始めた。すはやと、鬼るうちに思と違はず、誥ノ丸から火箭を射出したので、二ノ丸の芦屋は忽ち火を榮え燃え始めた。これをみた二ノ丸の雑兵は様子をかき、二人三人と屋根へ登り、火消しに努めた。これを見た広繁の二男の孫次郎は鉄砲を取つて、いち早く狙撃して倒した。繞りて、いた五、六人も皆打たれ、轉落したので、恐れて屋上にのぼるものはなく、火炎は熾んに天に沖した。長船又右衛門、生石藤四郎、鈴木四郎兵衛、お呷平藏、大森壺などは火煙に包まれて右往、左往あわて廻つて、いる。広繁はこれに力を得て、五百余人を引率して内外に馳せ、猛勢のうちに着進したので、生石勢は前後を突つて、われ先にと、北方を逃して、遠征し始めた。秀吉方の軍勢はこの敗軍と出遇ひ、引き返して城を遠巻に、一万余騎を出動せしめた。その危急を故はんと、毛利勢は先長経言を釋として、一万余騎を対峙した。城は左右細道にして、取引が自由でなく、城の七、八所守前の處で対峙した。秀吉の旗本から増援を出してくれば、小早川隆景、吉川元春も自ら手兵を出陣させて、一大合戦を試みんとする決意があつたが、如何なる意圖のあつたもので、毛利方も手を引き、勝敗を決せしめて、双方とも全軍を引き上げた。

この戦果は、城兵側は井上新五右衛門、内藤七郎左衛門以下數十人戦死し、備前側は沼本新五郎、楠村五大夫、上田十右衛門、福田、芦田、牧などの将兵を失い、手負者も双方数百人に及んだという。其の後数回に亘る攻防戦については、落城し、高松城合戦の前衛戦であった。

△加茂城跡(現在の地形によって想像したもの)



(城地の南に惣風という地名がある。往昔この附近は沼地であったらしく、後世埋め止せられて農地になったので、惣埋(そうづめ)の名が起り、ついに惣風に轉じたという。また長江という泉は、落地がある。長く続いた入江の意である。城址のある所を、後世貝という。スガは洲の古の約に、こ水の中、浅い場所、土砂が表面に現われた處がある。これらの地名から考察して、昔は海浜であったことが判る。それが次第に陸地となり、足守川の流域に變じ、水勢の弱く處に從つて、流は西に轉じて、ついに現在の流に定まったものであろう。)

△文獻に從へば、上山兵衛助元忠が一部將として、西ノ丸に立籠つたとあるも、行動のため城を脱出して救援軍に加つて、いたのはなにかと考へられる。落城後、撫川城を預り高松城合戦の後詰をした勇士である。

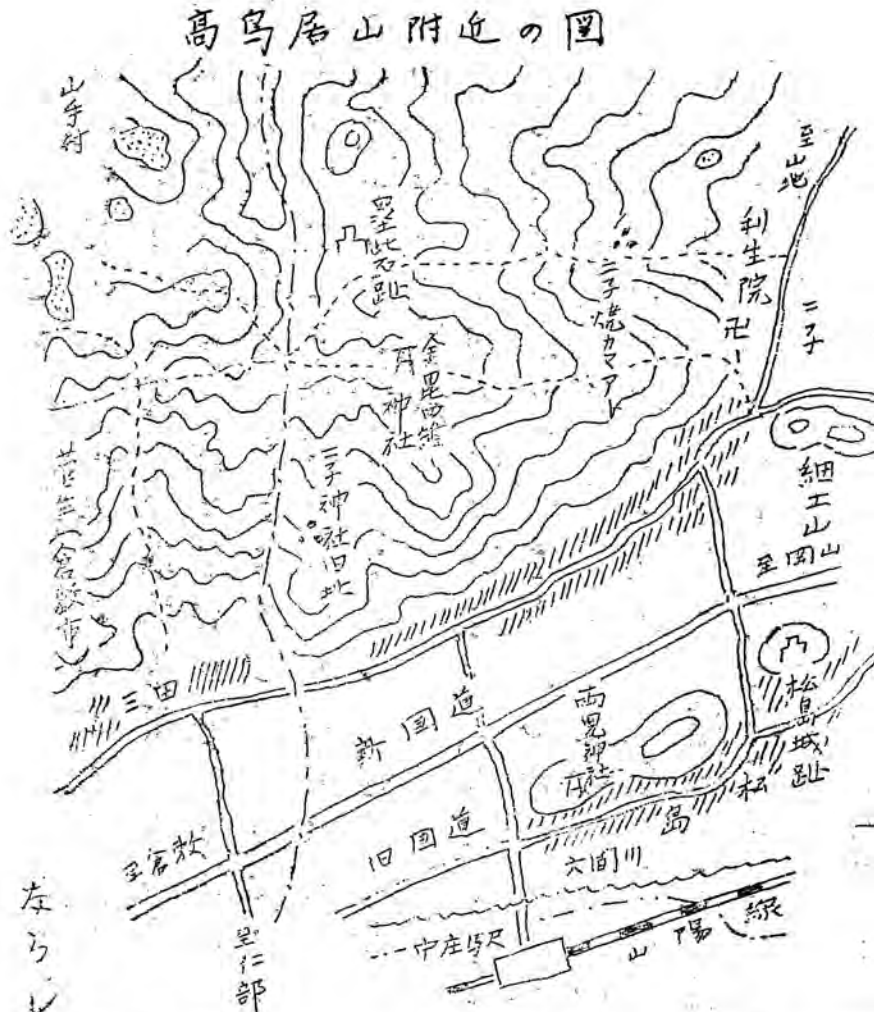
前記の如くこの城は戦後毀され、廢城となり、年を経てその構造を知ることは出来なかつたが、戦記によれば、曲輪は五つ以上にわかれ、その周囲には溝渠をめぐり、二箇所の溝橋を架して、いたようである。城郭は相當の地域に亘り、殆んど東加茂から新左方面に通ずる旧山陽道に沿つて東西に長く、西に足守川の流を控え、大手は当然南向にせぬはならない構築である。地形上毛利方は防禦上重要視して、いたのではなかつたと思われ、しかり城兵の配置に考慮ははられ、いたなかつた結果、和を欠ぎついに敗因に導いたのである。

○高島居山の聖蹟

二子の真言宗刹生院の街道に「從是高島居山 全毘羅登道 八町」「嘉永二年己酉十月吉日建之」「別当吉祥山刹生院 現住 増慧代」「願主 玉島中買町 嶋屋安兵衛 三田村 山地萬藏」と刻んだ。高さ一間ばかりの直標がある。ここから山道を辿ると「全毘羅大権現」として、高松を潜るの銘ある石華表に「全毘羅大権現」の扁額がかけられてゐる。華表を潜ると一小祠に出る。路を社後にとつて進むと高島居山の頂に達する。ここが天正の昔、毛利軍が兵備を配置した聖蹟のあとと、いふが今は何にもその跡形は遺つてゐない。羽柴勢の中國侵畧に對して毛利軍が足守川の流域を防禦線に定める上において、後詰として鷹巣(釈ヶ峯)・仕手倉・高島居の峰嶺に一線を劃して陣營を配置せねばならぬことは、誰れも当然の計と考へられる。この峯は南端の高地に於いて、庭瀬方面の平野を眼下に俯瞰し得る展望台である。この方面の動靜を警備監視し、且つ若干の機動部隊を駐屯せしめて、常に松島、撫川、庭瀬などの諸城と緊密な連絡が保たれてゐた處である。日記によれば「二子山の峯は要害にして、城番日幡城主日幡八郎左衛門に對して、昔州より乃美四郎元信在城す」と簡単に

たづけてゐる。ニ子山は高鳥居山の別名であるが、一説にはこの砦を利生院の東にある小高の丘で、俗に細工山を指すものもある。なお研究を要するものと思ふ。

ここに疑問の生ずることは城番日幡八郎左衛門は日幡城主日幡六郎左衛門景親の舎弟にして、日幡城主とあるは誤りであろう。レカレシ一時日幡城主におつたたむ知れな。次に乃美四郎元信は宮路山城主にレテ、この城は高松城陥落に先立ち、敗走してゐるの砦に配属したものと考へられる。



この山には日蹟が多。金毘羅宮の西南約一料の處に巨岩がある。往昔神功皇后が朝鮮から凱旋の時に、筑紫にて應神天皇を生ま給ひ、大和に帰還の途次、この沖合(昔は津波心あつた)に船舶を停めてここに居館を置かれたといふ。古記に、登踏八町三十間、俗に影向山(影三)といふ。當時皇子は二歳にならせられた。たゞで後世、この里を二ツ子の里といふ。今ニ子村といふとあり。もと應神帝を祀るニ子神社といふ社祠があつたが、萬寿年間(言高し)に沖合は周壘され陸地となり、参詣に使

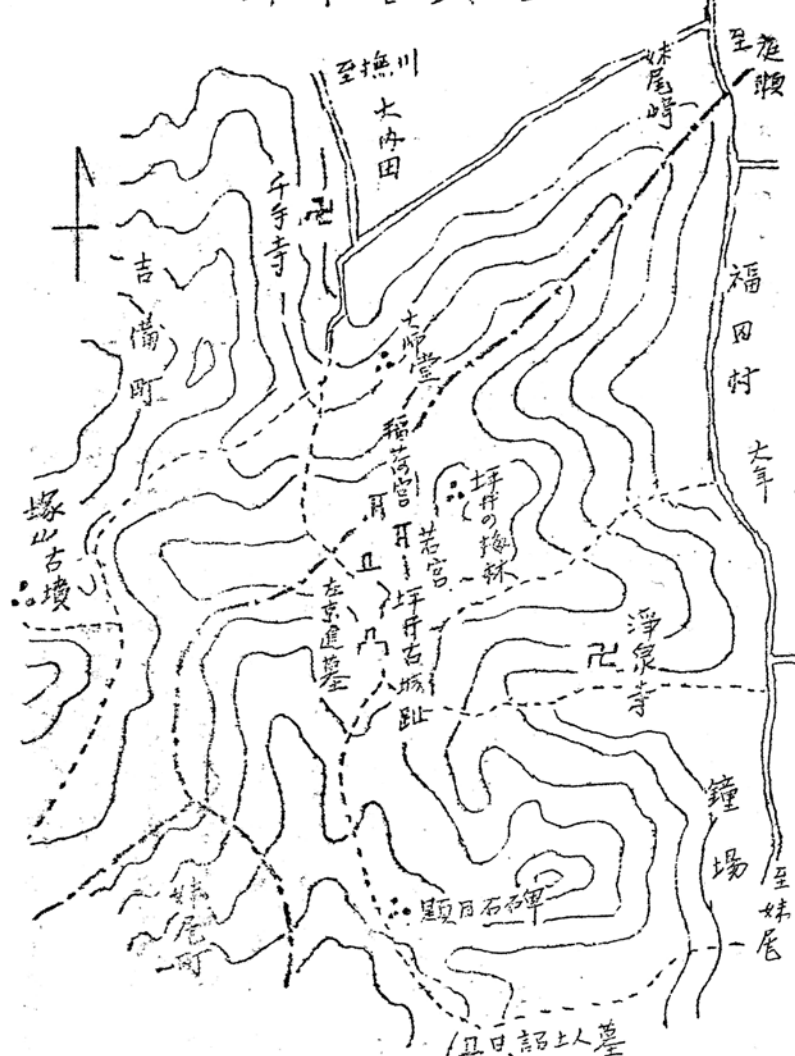
たと傳へられし。これが現今の両鬼神社であるといふ。ニ子神社旧址の南に一高丘がある。東は岡山、西は玉島までおさへるものなく、一直線に見通される位置である。昔通信機関の繁達しな、時代に相場師が、米価の変動を手續を合圖に、望遠鏡によつて東西に連絡して利益を貪つていた通信所であつたといふ。いわゆる壘断を恣にしたのである。思ふにこれは傳説に過ぎない。

金毘羅宮の西、山手村へ行く山中に五万原といふ處がある。古老の語に、延元元年(二三三七)南朝の忠臣大江田氏経が足利直義の軍勢を阻止すべく、福山城(今敷通)に立籠つたが、衆寡敵せず敗走した時、敗残兵がこの山中に隠道レつに自滅した處といふ。五万原は「御免腹」から轉訛したと傳へらる。また宮の西北に堂屋敷といふ處がある。ここを神功皇后の駐居のあとといひ傳へてゐるが、真偽は判らぬ。附近から古瓦の破片を掘り出すことがある。望鏡から山道を辿つて東へ下ると、路傍左側の削りとられた山肌、に陶器の破片や、陶器を焼いた窯跡が露出してゐるのを見る。明治の末頃、この地の坪井和七郎が創めたニ子焼の窯跡である。和七郎はアメリカに渡り、後ち帰國して、栗樹園を經營し、傍ら陶器の製造に従事した。故あつて再び渡米し、再度帰國し昭和二十八、九年頃、八十余歳で歿した。

○坪井古城跡

福田村六年の部落なら山直をのぼると、約三町で坪井部落に出る。ここは人家三十余軒あり、その西南の丘陵に古城跡がある。古書に「此所古城跡、在空堀等並の家坪井村と云ふ」とあり。いまわ竹藪に包まれ頂上は二畝歩ばかりで、雑草に生つてゐる。残礎もなく、僅かに遺蹟としての形態を存するだけである。城跡に降りて、眺望すると、東から南へかけて、尾、興除の手野を眼下に見下し、他方は山林を圍繞してゐる。西は一町程

坪井古城址



道のりでは峠を境にして、吉備町の大木田の塚山部落に接している。昔の城の大手口は東南の鐘場から浄泉寺の前を通つて昇るのである。この城はむかし、坪井左京進というものが、居城したと口碑に傳つてゐるが、その年代は詳くないが、この地方に坪井姓を名乗るものが多く、その末葉と稱して系譜を所傳してゐるものがある。これは永禄の頃から、享保の末まで百五十余年の断片、永禄の初年に、伊勢ノ國(三重県)の目賀の産である、坪井和泉守老屋入道というものが、永人して諸國を流寓し、中國に來つて始めて毛利輝元の幕下となり、都宇郡山田の山中に小城を構えてお着したのが、この坪井姓の始祖となつてゐる。家紋は、年月に白虎、或は松皮菱に茶色(茶)の花辨を用いてゐる。

永禄十年の松山城合戦の時、備中幸山城主石川左衛門尉友成が三村元親に組して毛利氏に逆心したので、福山、幸山両城は芸州勢が奪取り、福山、回司老成守が在番した時、老成はその加勢として従軍し、加勢の役を勤めた。其の後、天正十年の高松城の合戦には備中別府、石谷島宗(もつはな) (ま倉敵守)の二箇所の小將を、備中(備中)に後詰として井上旧者守などと、兵に南部方面の警備に充てられた。戦後は毛利氏を去つて備前の宇喜多秀家に従ひ、高松四石を食んだ。老成の子に五良兵衛老清、兵衛老成の兄弟がある。五良兵衛老清は高松の役には都宇郡三子村左衛門尉の舎弟、日如城主日如六郎安衛景親の舎弟、入部左衛門に芸州水乃美少輔四郎元信を以て加勢に北の時、これに参加して共に止

罷つた勇士である。戦後は鳥羽の城主、鳥羽左衛門尉の婿養子となり、二子村に止まつて永住したという。この老清は、丈録の役には宇喜多秀家の軍に從つて渡鮮して功をたて、凱陣の時、涅槃の画像、文珠の画像、十三佛の像、鷹の絵、鏡鉢、打鳴などの佛具類六具を持ち帰つた。涅槃の画像と鏡鉢は中左村の安性山來也寺へ、また十三佛の像は二子村の多圓寺にせられ、寄進した。いまに傳來する。その他は家室として坪井家に秘藏する。舎弟の兵衛老成は永禄十一年の夏八月、所用あつて備前岡山へ出張中、芳賀安清というものと当座の酒を交はしたが、些細なことから争論となり、此が原因となつて坪井城は夜討をか行かれ、焼き打され、その上兵衛老成と、その家臣吉田五良右衛門尉は殺された。その夜、兵衛老成の元五良兵衛老清は、安清を捜してゐるうち、鹿瀬に居ることを附き止め、鬼事に討取つて弟の仇を報じたという。

兵衛老成の遺子を勘治郎老景、其の子を甚右衛門老判とす。老判に一男一女があつた。男を彌右衛門とす。彌右衛門は鹿瀬藩主戸川出佐守へ三代安宣が、同経殿助へ四代安風へ仕へて知行五十石を賜つて、二子村の代官を勤めた。女は同苗の味兵衛といふものに嫁ぎ、文左衛門を生んだ。文左衛門も戸川氏に仕へたが、間もなく事情があつて丹波ノ國龜山へ移つたという。(この文左衛門は寛政十年十月十二日、撫川領主戸川達教の命によつて差出された戸川家初明の家臣の名簿に「郡奉行 高五十石 坪井文左衛門平藏」とある。は紛れもなく、この人にして戸川氏の旧臣なることは証歴歴然たるものである。何故に遠國龜山へ移つたか、その理由は、鹿瀬藩主戸川氏四代安風が若くしてこの地を去り、世継がなく、その頃の遺當が撫川領主に其手に轉封したので、その時官を辞して、誰れかの手裏を求めて、当時玉島地域を所領してゐた龜山藩主松平氏に仕官し、この地を離れたものといふは信じてゐる)。

本家筋にあたる彌右衛門の子を甚右衛門老輔とす。老輔の祖父は坪井家代々の感状并に古文書などを所持してゐたが、これを甚右衛門に傳えた。レタレ甚右衛門は幼少の故、文左衛門の所望によつて讓渡したという。老輔の子の龍兵衛は松下新太郎といふものの家臣となり、二百石を知行した。松下氏は如何なる人物か判らぬ。間もなく辞して浪人した。その子と左衛門老成を経て七左衛門老正に至り、先祖の老清が高松の陣から持ち帰つて秘藏してゐた文珠の画像一幅を安性山來也寺の住持が年來所望してゐたので、正徳元年に正老成の北後遺善のため同寺に寄進した。打鳴は、享保十二年四月に同院内の心望院主が來訪し、一覽の上所望されたので、後には坪井村の中山某の手に移り保存に寄れたという。鷹の絵は永く家室として傳へ、後には坪井村の中山某の手に移り保存さ

北へいたが、大正の頃には紛失し、いまはどうか判らない。二北の事柄から考へると、彌右衛門が徳川治政時代になつて鹿瀬藩に仕へたのは、寛永以後のことである。宇喜多氏の滅亡が慶長五年の関ヶ原の敗北後である。九十九彌右衛門の父、甚右衛門老判の世代にはすでに家祿を離れて世数年間は無頼者となつたものと想像せられる。従つて坪井城は永祿の頃に築城されて、慶長五年まで約四十年間の歳月を経て放棄されたものであろう。後裔は二子、庄あたりに住して永く御士格を勤めていたが、享保以後農業に帰した。現在二子、或は山田の坪井姓はその末葉が栄えたのである。

○坪井氏の畧譜

老辰 伊勢国住人知泉守 老景 勘治郎 甚右衛門 慶長頃の人
 永祿の頃、坪井城主 二子の岩在番、後ち男羽 宇喜多氏 関ヶ原合戦宇喜多氏に仕へた。坪井城放棄して浪人となる。
 毛利氏に仕へ四十石 城主鳥羽左門尉の養子 となる。正保年間宇喜多氏 家に従ひ朝鮮の戦に備陣す 二子に住す
 老清 正保年間高松の役に 二子の岩在番、後ち男羽 城主鳥羽左門尉の養子 となる。正保年間宇喜多氏 家に従ひ朝鮮の戦に備陣す 二子に住す
 老正 七左衛門 享保の頃三子村に住す。 山田に栄え農業を営む。

兵衛之丞 坪井城主、宇喜多氏に仕へ 老領安清に殺害さる。

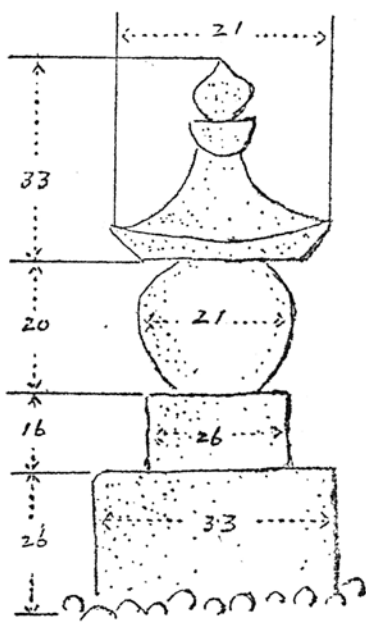
彌右衛門 知行五十石、二子村に住居す。老轉 七左衛門と改む。権兵衛 老友七左衛門 杉新太郎に住へ、老轉頃の今 知行二百石、後ち 浪人す。

女某 正保頃の人 同苗典兵衛の妻 庭瀬城主山田左衛門に仕へ、知行五十石、即奉行、後ち 官を領し、坪井城に移る。

○坪井城主 坪井左京進の墓所

坪井古城跡から竹藪のなかの細道をたどつて約三百米昇ると、雑木林の中に四尺四方を粟石にて置み、その中央に無名の五輪塔一基がある。俣人はこれを源平時代、平家方の部将妹尾大郎兼光の墓と考へて、坪井左京進といふものか、藤戸に迫つた源頼朝の軍に包圍され、自刃した墓石と傳へてゐる。この地は兼光領收の處にして、ここに属城を置いたか、知れず、一應首肯し得らるるが、左京進がこの時代の人であつたかどうか疑はしむ。もとよりその系統は明らかでないが、前後から考へて年代は三百八十餘年も下つた永祿十一年に討死した兵衛之丞か、或は坪井家の始祖にあたる坪井知泉守辰辰入道の墳墓ではなからうかと考へられる。左京進は坪井家の別名ならんも、知るべき資料は遺憾ながら見あたらない。この墓石は、もとよりのまゝの墓から少しさかつた竹藪中であつたものを、明治の初期にここに移したものである。墓の台石は高さ廿四寸、前面の幅廿三寸、横面の幅廿五寸の角石にして、墨石と共に苔蒸して古色を帯びてゐるが上部の墓石はそれより新しく、石質を異にしてゐる。これは移轉の際破損し再造したものである。

坪井左京進の墓



二子から上へ二三百米は、丸りの山道を行くと、壊れた五輪塔を混えて二十数基の墓標がある。これが坪井家累世の墳墓にして銘に 享保三戌年五月廿五日、享保四年己未霜月七日、延享四年、宣應、天明元等、大政十等、文化などの年号が判読せられる。享保以後ここに帰農永住してゐるものがあることは、誨を俟たない。(ここに若官、稲荷宮、坪井の梅林など関係のものがあるが、別項に譲ることとする) (おわり)

各種自動車修理
吉備モーター商会
 吉備町庭瀬・国道筋
 TEL 214

セルフサービスのお店
源 河内百貨店
 吉備町撫川
 吉備局 電話七番